

# 評論 森山文切の現代川柳の世界

文学博士 平 宗星(東京川柳会副主宰)

## はじめに

川柳という文芸は十八世紀の中頃、初世川柳柄井川柳(一七一八〜一七九〇)によって始められた口語発想の一行詩形による(人間諷詠)の(短詩)である。

この川柳文芸は初世川柳の選句集『誹風柳多留』の刊行によって独立した文芸となった。その特色は次の三点である。

- ① 「二句にて句意がわかる」こと。
- ② 「一章に問答」があること。
- ③ 「内在律」の韻律であること。

これが初世川柳の選句した川柳文芸の核となる川柳観である。

初世川柳の没後、川柳という雅号は川柳宗家を意味する語となる。「川柳選」を当時、「川柳点」と称しており、やがて「川柳」と略称され、宗家を意味する雅号がそのまま文芸名

となった。

江戸時代の四世川柳の時代に文芸名として「狂句」が用いられ、五世川柳はそれを「柳風狂句」と名づけ、初世川柳を祖とする文芸であることを表明し、「柳風式法」や「句案十体」と呼ばれる「狂句」の作り方を示し、家元制度を確立する。

六世川柳は明治時代に入って初めての川柳宗家である。六世川柳は「柳風狂句」を明治時代に普及しようと、川柳宗家が主宰する「柳風会」を組織し、東京を中心に全国に「柳風狂句」の名称を広めた。

一方、明治三十六年に「川柳中興の祖」といわれた井上剣花坊が新聞「日本」で「川柳」欄を創設し、以後、「川柳」の名称が一般化する。剣花坊は江戸の川柳を「古川柳」と呼び、近代の川柳を「新川柳」と呼んだ。二〇二〇年は、この剣花坊生誕一五〇年目の記念すべき年である。

また「狂句百年の負債」を返せと川柳宗家に迫り、初世川柳の原点に還れと提唱したのが、もうひとりの「川柳中興の祖」と言われた阪井久良伎である。

明治時代の久良伎系の川柳は、「古川柳」の

「三要素」といわれる「穿ち」「可笑しみ」「軽味」を重視し、「五七五」の定型を川柳の定型と考える。この定型韻律を「外在律」と呼ぶ。この川柳の系統を「伝統川柳」と呼ぶ。東の川柳きやり吟社、西の番傘川柳本社が、その代表的な川柳結社である。

一方、劍花坊系の「新川柳」は、西洋の近代詩の〈短詩性〉を重視し、川柳を「一呼吸詩」と名づけ、定型は十七音の音数の総体と考える。これを「内在律」という。この「内在律」を「古川柳」から現代川柳まで継承された川柳の定型と考える。こうした川柳の系統を「革新川柳」または「現代川柳」と呼ぶ。東は、十四世川柳 根岸川柳が創設した東京川柳会、西は、劍花坊の「川柳一呼吸詩」の川柳観を継承した麻生路郎の川柳塔社などがある。

大正時代になると、劍花坊が創設した柳樽寺川柳会の機関誌『川柳』は『大正川柳』と誌名を改称し、日本全国に「新川柳」を普及させた。

大正末期に「新興川柳運動」が田中五呂八や鶴彬らを中心に行われた時、「詩性川柳」を提唱した田中五呂八とプロレタリア川柳を提

唱した鶴彬の間で激しい論争があった。この時、劍花坊は『大正川柳』の誌上を開放し、両者の論争を掲載した。

劍花坊は、大正時代に流行したアメリカの民衆詩人ホイットマンの詩集『草の葉』の強い影響を受け、川柳を「一呼吸詩」と呼ぼうと提唱し、「川柳一呼吸詩」を信奉する川柳観を「一呼吸主義」と呼んだ。

この劍花坊の川柳観に共鳴し、関西で「川柳一呼吸詩」をいち早く取り入れたのが、川柳塔社の創始者・麻生路郎である。

麻生路郎は昭和三十二年十月、『川柳雑誌』（三六五号）に「一行詩人」と題する文を発表した。その文の中で「川柳は一呼吸の一行詩」と規定し、「一呼吸一行詩の川柳は、たとえ短い十七音中心のものであろうとも、私の生命を刻み込むのに尤もふさわしい」〈短詩〉であると述べている。

森山文切は、その川柳塔社の同人であった。その川柳塔社のweb川柳をやっていた。現在は川柳塔社を退会し、川柳のwebサイト「毎週web句会」代表として活躍している。

私が森山文切と初めて会ったのは、二〇一八年二月、江畑哲男の東葛川柳会の二月例会

の会場であった。この時、森山文切からweb句会のことを聞き、川柳塔社のweb句会に選者として三ヶ月間、選を担当させてもらった。実に楽しい三ヶ月間だった。

二〇二〇年四月に入り、『せつえい 森山文切川柳句集』が送られてきた。一読して森山文切の川柳に心を惹かれた。この句集は文切が川柳を始めた二〇一四年から二〇一九年までの六年間に発表した二五六の川柳作品を収録したもので、webで発表されたものとそれ以外のものに大別され、掲載されている。

森山文切の川柳作品は「伝統川柳」から「詩性川柳」を経て「ウェブ川柳」まで実にバラエティに富んでいる。

私は森山文切が探究している「ウェブ川柳」も「現代川柳」の一分野だと思っている。

以下、森山文切の「現代川柳」の世界を比較川柳論の視座から批評してみたい。

## I 森山文切の「伝統川柳」

森山文切の句集の中で「伝統川柳」だと思える川柳作品は、次のような作品である。

目を覆うための両手に成り下がる  
喋ってはいるが会話はしていない  
新しい指輪でチーママが歌う  
ムーミンが消えてしまった子供部屋  
自分でも訳がわからぬほど叱る  
うなずいた人から順に消えて行く  
学校の壁には有罪の証拠  
犯罪の臭いはしない屠殺場  
米軍のフェンス内にも咲くデイゴ  
温泉に響く洗面器のやる気  
武士だったころの名残がある秋刀魚  
弁解の余地にみかんを置いておく  
カーテンが揺れて養育費の話

これらの「伝統川柳」には、作者の現実生活している日常の場面がややや自虐な「穿ち」の視点をもって「五七五」の「外在律」で詠まれている。四〇代の作者は家庭では、三歳、五歳、七歳の三児の父であるという。

ムーミンが消えてしまった子供部屋  
自分でも訳がわからぬほど叱る

この「子供部屋」や「自分でも訳がわから

ぬほど叱る」の川柳作品には、三児の父・森山文切の日常生活の一場面がスナップ写真のように描かれている。このように「伝統川柳」と呼ばれる川柳は「五七五」の「外在律」の定型によって、日常生活の一場面を描いた川柳なのである。

森山文切がこのような「伝統川柳」の書き方を身につけたのは、父・森山盛桜の影響によるものだと思われる。

もし森山文切が川柳塔社を退会せず、川柳界の若手のホープとして各地の川柳大会に参加し、父の後継者として鳥取県の川柳界で活躍していたら、彼の川柳人生は変わっていただろう。

彼は川柳塔社を退会することによって、父の歩んで来た川柳の道とは違う道を歩む覚悟を決めたのだろう。

森山文切が求める現代川柳は不特定多数のグローバルな「ウェブ川柳」なのである。

## Ⅱ 森山文切の「詩性川柳」

森山文切の句集の中で「詩性川柳」だと思える作品は、次のような作品である。

ニンゲンが生まれたころにできた棘  
報われぬ唇二丁目二番二号  
唇に星をかじった跡がある  
二次元に戻りたがっているサクラ  
だれかがわらったしゃぼんだまがわれた  
じいさんのナタで昭和をぶった斬る  
煮玉子は日焼けサロンに夢中です  
中指を般若の口に入れて  
ビックリマンシール剥がして父になる  
階段にカミキリムシの他殺体  
カロリーが高そうな句を抜く選者  
左手だけなら河童になれそうだ  
木偶ですが花を買ってもいいですか  
罅割れた甕だが翼ならあるぞ  
寝過ぎしたようです空が新しい  
はじまりはミルクを湯煎するように

川柳界で「詩性川柳」の代表作といえば、次のような作品である。

河童起ちあがると青い雫する

川上 三太郎

子よ妻よばらばらになれば浄土なり

麻生 路郎

にんげんのことばで折れている芒

定金 冬二

ざまア見ると向ける顔の中の岩磐

十四世川柳 根岸 川柳

牛のマンドリンを聞く騎兵―秋の胃

十六世川柳 青田 川柳

帽子を脱ぐ 目と鼻がはらはら落ち

中村 富二

白い花ふつと誰かの顔に似る

岸本 吟一

森山文切の「詩性川柳」の中で特に推奨したい川柳は、句集の巻頭の一句になっている次の作品である。

ニンゲンが生まれたころにできた棘

この「詩性川柳」を読んで定金冬二の次の「詩性川柳」を思い出した。

にんげんのことばで折れている芒

私は「詩性川柳」を創作する川柳作家には冬二の川柳にみられるように心に深い哀しみを溜めてそれを吐き出すような〈想い〉が何よりも大切だと思う。

その意味で森山文切の「ニンゲンが生まれたころにできた棘」や次の「しゃぼんだま」の川柳は心に残る「詩性川柳」である。

だれかがわらったしゃぼんだまがわれた

この作品はすべてひらがなで書かれており、韻律は「四四・六三」の「二句一章」の「内在律」の定型韻律で造型されている。作者は「二句一章」を意識していないかもしれないが表記といい、韻律といい、「伝統川柳」とは全く異なる表現方法を試みている。私なら一字アケを用いるか、次のような多行形式を用いてより視覚的な効果を狙う。

だれかがわらった

しゃぼんだまがわれた

この「詩性川柳」を読んで「しゃぼん玉」の

童謡を思い出した。この童謡を作詞した中山晋平は子が亡くなり、その哀しみを童謡の歌詞に込めて書いたといわれている。童謡では、「しゃぼん玉」は天に召され、神の許に昇天するが、森山文切の「しゃぼんだま」は割れて消えてしまう。

私は定金冬二という川柳作家を尊敬し、冬二の現代川柳を「詩性川柳」の典型と考えている。

今の川柳界には、定金冬二のような「川柳の鬼」といわれた川柳作家がいないのはとても淋しい。

### Ⅲ 森山文切の「ウェブ川柳」の構造

森山文切がたった六年間で独自の「文切川柳」ともえる「ウェブ川柳」の世界を構築したことに驚嘆する。すばらしい才能である。

以下、「文切川柳」の世界がどのようなものかを、具体的な川柳作品を取りあげながら、批評してみたい。

### 美濃和紙のブラキオサウルスの産毛

この森山文切の「ウェブ川柳」は彼の初期の代表作ともいえるものになるだろう。現代川柳の魅力は言葉と言葉の連結による〈飛躍〉にある。そして独自の「内在律」によるリズムの探究と比喩表現の創造である。

子どもの頃、万華鏡を親に買ってもらって、何日も形が変わる万華鏡に夢中になっていたが、森山文切の「ウェブ川柳」はそうした万華鏡のような面白さがある川柳である。

この「ウェブ川柳」のリズムは「五八三」の十六音の「内在律」による「一句一章」の構造になっている。

川柳の伝統的な構造は「一句一章」の切れの無い構造である。

この「ウェブ川柳」は「の」の助詞を用いて「美濃和紙」と恐竜の「ブラキオサウルス」と「産毛」の名詞をつなげている。特に「美濃和紙」と「産毛」をつなぐ「ブラキオサウルス」がこの川柳作品の要となるキーワードである。

「ブラキオサウルス」は約一億五千年前の中生代ジュラ紀後期の巨大草食性の恐竜である。体長が約二十五メートル、体重が八十トン、頭頂のまでの高さは約十六メートル。恐

竜の中で最も高く、最も重いといわれている。この恐竜の骨格化石標本はアメリカ・シカゴのフィールド自然史博物館にある。『ジュラシック・パーク』の映画にも登場する有名な恐竜である。

この巨大な恐竜の「ブラキオサウルス」を「美濃和紙」で作ると、どのような恐竜が誕生するのか想像するだけでも楽しい。「産毛」の三音の体言止めが効いている。

## ガムフェスのラムセス二世風のガム

この「ウエブ川柳」も「の」の助詞を用いて「ガムフェス」と「ラムセス二世」と「ガム」の名詞をつなげている。韻律は「五九二」の十六音の「内在律」で造型されている。

「ガムフェス」とは「ガムシロップ」というロックバンドが主催する全国ライブ。

「ラムセス二世」はミイラとなり、カイロのエジプト考古学博物館に所蔵されている。実在した王で六十六年間、王位を継承した。この「ラムセス」という名称は、エジプト神話に登場する「太陽神ラーによって生まれた」という意味である。長身だったといわれている。

さて、問題は「ラムセス二世風のガム」が何をあらわしているかである。この王が長身であったことを考え合せると、この「ガム」は「板状のガム」のことをあらわしたメタファー（暗喩）だと解釈できる。

作者は「ガムシロップ」のバンドが主催する「ガムフェス」と称する全国ライブに行つて「板状のチューインガム」を噛みながら、この全国ライブに参加しているのかもしれない。

## 仏壇にグルテンフリーナポリタン

この「ウエブ川柳」は「一章に問答」のある構造になっている。まず作者は上五の「仏壇に」と読者に（問い）かけ、その（答え）が中七下五の「グルテンフリーナポリタン」である。

この「ウエブ川柳」でキーワードになっているのが「グルテンフリー」である。「グルテン」とは、「小麦粉に含まれるグルテン」とグリアジンという二種類のたんぱく質がからみ合ってきたもの。小麦粉に水を加えると、「グルテン」に弾力性が生まれ、「グリアジ

ン」に粘着性が生まれる。この「グルテン」の性質を利用して生まれたのが、「パン」、「 Pasta」、「ラーメン」、「うどん」などである。

さて「グルテンフリー」とは、「グルテン」の含まれる食品を口にしないということ。特に小麦アレルギーの体質の人は「グルテンフリー」を実践すると、体質が改善されるという。

「グルテンフリーナポリタン」とは、小麦粉を使わない米粉など作られたナポリタンのことである。

作者が「グルテンフリーナポリタン」を「仏壇」にあげている行為から仏壇に祀られている人は生前、小麦アレルギーの過敏症などであったのかもしれない。この「ウェブ川柳」には、作者の死者に対する優しい視線が強く感じられる。

## 干からびたヤモリ復活したイエス

この作品は「ウェブ」以外で発表した作品であるが、極めて奥の深い川柳だと思う。

「干からびたヤモリ」と「復活したイエス」

のイメージの対比が実に見事である。二十世紀を代表する詩人にエズラ・パウンドがいるが、彼は日本の俳句の影響を受けてアメリカの現代詩に〈短詩〉を導入し、「イマジズム」(心象主義)といわれる新しい「モダニズム」の〈短詩〉を誕生させた。次にあげる「地下鉄の駅にて」は、その代表作である。

群衆の人々の顔の亡霊  
濡れた、黒い枝の花びら

(平 宗星訳)

この二行の〈短詩〉は一行目と二行目が全く異なる二つイメージで造型されている。これをパウンドは「重置法」と名づけた。俳句では、この手法を「物衝撃」と呼んでいる。さて森山文切の現代川柳にもこの「重置法」が用いられている。

作者は「二句一章」を意識していないが、この川柳は「五三・六三」の十七音の「内在律」で造型されている。一字アケを用いて「二句一章」を読者に印象づけると次のようになる。

干からびたヤモリ 復活したイエス



## おわりに

森山文切の発表した「ウエブ川柳」は川柳界では、あまり見かけない「文切川柳」と命名しても良い程、独想的な現代川柳である。

## 美濃和紙のブラキオサウルスの産毛

特にこの「ウエブ川柳」は「言葉の魔術師」と呼ばれる加藤郁乎の次の現代俳句を彷彿とさせる。

## 落丁一騎対岸の草の葉

この現代俳句は「二物衝撃」と呼ばれる「重置法」が用いられている。「落丁一騎」と「対岸の草の葉」の「重置法」である。それぞれの言葉はメタファー（暗喩）になっていて、重層的な意味をもっている。例えば、「対岸の草の葉」の「草の葉」にはアメリカの民衆詩人ホイットマンの『草の葉』の詩集の意味が重ねられている。

森山文切には、今後、川柳のwebサイト『毎週web句会』を通してこのような独創的な〈短詩〉の世界を「ウエブ川柳」として展開していったほしいと思う。アクセス数は百万回近くと聞いている。世界に「ウエブ川柳」が広まってゆくことを願っている。今後の一層の活躍に期待している。(二〇二〇・四)

【著者紹介】平宗星（たいら・そうせい）。昭和三十三年六月三十日、東京生まれ。かに座。本名・辰彦。玉川大学文学部・同大学院にて英文学専攻修了後、早稲田大学大学院文学研究科にて芸術学（演劇）を専攻。シェイクスピア劇と日本古典芸能の演劇性の比較研究にて博士号を取得。文学博士。山村祐主宰の「森林の会」にて一行詩人として参加。その後、東京川柳会同人、運営同人を経て現在、副主宰。著書に『撩乱女性川柳』（緑書房、一九九七年）など。大学にて比較演劇、比較文学論、比較短詩論、日本文化論などを担当している。